

入選 栃木県 伊東 桂子 様 (80代 女性)

年金制度はいつ頃からあったのだろう。

私は中学を卒業して上京、東京神田の小さな金物問屋の事務員として就職、厚生年金に加入しました。

その後、20才で結婚した際に厚生年金を一時金として受け取った記憶があります。

20代で子どもを2人産み、30代は子育てをして、40才になったらまた働きに出ようと計画し、ほぼその通りに暮らして来ました。

しかし人生、アクシデントは付きもので、主人の勤めていた会社が倒産、即、車を一台購入して担当していた得意先をもらって自営を始めました。昭和44年です。すぐ国民年金に加入しました。ベージュ色の国民年金手帳の表紙に厚生省とあり、当時は印紙を買って市役所に納めに行き、日付の入った検認印を押してもらうという、今では考えられない方法で納めていたのです。

子ども達も小学校の高学年になり、私は知人の紹介で自動車のディーラーに正社員として就職出来たのです。38才でした。昭和51年10月1日、再度、厚生年金に加入、当時もまだ手帳方式で、オレンジ色の表紙に社会保険庁とあり、ベージュ色の国民年金手帳と2冊、今も大切に保管してあります。

私が先に就職して3ヶ月あまりが過ぎた頃、主人は自営といっても車一台でブローカーの様な仕事でしたので、子どもが後を継ぐわけでもないし、と思っていた矢先、同業の会社の社長さんからうちの会社に来ないかとお誘いをいただいたのです。渡りに船とはこういう事をいうのでしょうか。在庫など大して無く、借金もなかったので、車をすぐ売って、主人も勤め始めました。もちろん厚生年金に加入していただきました。

子ども達も小学4年と中学1年に成長して夫婦共働きの新しい生活が始まって数ヶ月、私の人生にこれ以上の不幸があるのだろうかと思う、辛い悲しい出来事が…

私の手作りのお弁当が入った小さなボストンバッグを持って、「行ってらっしゃい」「今日は少し遅くなるかも、歓迎会をやってくれるらしいから」「先に寝てていいよ」「分かった、じゃあね」主人との最後の会話でした。そして帰らぬ人となってしまったのです。鉄

道の事故でした。

ご近所の方達が、通夜、葬儀を執り仕切って下さいました。当時はまだ自宅で行いました。

そして初七日を待って子ども達は学校に、私も会社に出勤しました。「女は強いナ」と陰口も聞こえてきましたが、この2人の子どもを育てていかなければと、自分でもふしぎな位に何もなかったかのように日常を取り戻していったのです。

そんなある日、勤めたばかりの主人の会社の方から電話をいただきました。

「奥さん、厚生年金の手続きをしましたので近いうちに通知が行くと思います」とのこと。

厚生年金？遺族年金のことでした。その頃は、人生50年の時代、今ほど年金についての意識が高なくて、私もよく解っていませんでした。

私たち夫婦は結婚して4年間、2人で一生懸命働いて埼玉県の朝霞市に小さな家を買いました。現在の様に住宅ローンという制度もなく現金払いでした。そのおかげで主人に突然先立たれても、借金もなく私も正社員として働き、時はバブルで景気もよく、とにかく働きました。夜はお弁当の工場でも働きました。

ですが2ヶ月が過ぎ3ヶ月が経ってくると私ひとりの働きでは厳しい現実もあり、中学生の長男は近くの酒屋さんでアルバイトをさせていただき家計を助けてくれました。

そして届いた遺族年金の支払通知書、子どもたちは18才まで、私には一生涯支払われるとのこと。83才になった私は、遠い昔にアルバイトをして助けてくれた長男も55才になり、今また私の生活を支えてくれています。

自分の厚生年金も期間を満たしていますが保留して、遺族年金をととても有り難く受け取っております。

幸いにして心身の健康に恵まれ介護保険を使うこともなく、健康管理の為のわずかな健康保険を使わせてもらい、自身の管理に努めています。そして今、一生懸命働いて年金を納めて下さっている若い人達に感謝を惜しみません。

そしてこの先の自分自身の問題として、この町の「高齢者総合福祉計画策定委員」のひとりとして参加させてもらい勉強しています。